

バリ島と文化

倉 田 稔

もくじ

はじめに	インドネシア	バリ島	バリの歴史	到着
12月17日、第1日目			ウルワツ寺院	
18日、第2日目			エンプル寺院	タマンユアン寺院
19日、第3日目			ウブド	
20日、第4日目最終日			デンパサール市内	日本と まとめ

はじめに

2012年、インドネシアのバリ島旅行をした。バリ島ではヴァカンスを過ごすためにビーチで遊ぶのが1つの世界であるが、そういう所へは全く行かなかった。

インドネシアがオランダの殖民地だったので、私がアムステルダムにいた時、インドネシア人とよく出会った。40年前、留学先のウィーンで、ドイツ語学校が終ってある日、学生皆の懇親会があった。そこにバリの外交官のお嬢さんが参加し、お姫様みたいに愛らしい人だった。丁寧に髪を結っている。彼女とお喋りをした。だが、まさかバリへ行くとは思っていなかったので、彼女のバリの住所を教わず、残念なことをした。

昔、ミュージカル映画「南太平洋」を見て、その歌が「バリ・ハイ」というので、バリ島が舞台なのかと、ずっと思っていた。だから期待していた。だが、映画は架空の島が舞台であって、ロケもハワイだったと最近知って、がっかりである。

インドネシア

インドネシアは、1万7500もの島々からなる。総面積が200万km²で、大半はマレー人である。70以上の種族からなる。農業国家であり、石油は世界で10位の産出だ(2000年)。インドネシアは、2億3千万人の人口で、世界4位である。だから大国である。イスラム教徒87%、キリスト教徒10%、ヒンドゥー教徒1%、仏教徒1%である。1日2ドル未満で暮らす貧困層は、国民の半数いる。公用語はインドネシア語である。ジャワ島に主都ジャカルタがある。そのジャワ島にインドネシア人口の半数が住む。

バリ島

バリ島は、周辺の島々と共にバリ州をなし、バリ語が話される。その字はインドネシア語と違う。農業と観光が主産業である。例えば、日本からの観光客は年45万人をこえる(2000年頃)。バリ島は、広さが5600km²で、東西140km、南北85kmである。最高がアグン山(3142m)で、第2がパトゥール山(1717m)である。人口は250万人(2017年には426万人)で、2万の寺院がある。だから「神々が住む島」なのである。バリ・ヒンドゥー教の島である。イン

ドネシアはイスラーム教徒が多いのだが、バリだけ違っていることになる。

このヒンドゥーの最高神は、イダ・サンヤン・ウィディ・ワサであり、この下に、生命を創造するブラフマン神、生命を保護するヴィシュヌ神、破壊と再生のシヴァ神、死の神ドゥルガ、がいる。バリ神話では、悪魔の最高位・魔女ランダ、黒魔術の霊ルヤック、聖獣パロンがいる。

米が2毛作で作られる。米が主に食べられる。水力発電だが、不足している、と。時差は日本とは1時間遅れる。11月から4月が雨期で、乾期は過ごしやすい、と。

バリの歴史

バリの歴史はこうである。B.C.2000年から人が居住した。BC 1 世紀に、インド人、中国人により、ヒンドゥー文化、仏教文化がもたらされた。A.D. 3 - 4 世紀にバリにヒンドゥー教が伝わった。4 世紀からヒンドゥー・ジャワ人が来る。913年ころ、クルマデワ王朝ができた。7世紀、ポロブドール寺院が建築される。10世紀、バリにヒンドゥー王朝モデルの多数の小国家が出来る。13世紀、ヒンドゥー王朝マジャパイトが台頭する。イスラーム教が到来する。マルコ・ポーロがジャワ島を訪問したという伝説がある。1292年にフビライが来襲した。15世紀までヒンドゥー文化であった。16世紀初頭、ジャワがイスラーム国家マダラムに破れ、ヒンドゥーのマジャパイト王朝がバリに逃れた。

2004年統計だが、人口の35・3%が農林水産漁業、36・4%が商業・ホテル・飲食・サービスに従事する。農業社会から徐々に観光国に推移してきている。農民の平均月収は50ドル未満で、観光従事者は50~150ドルである。総生産は農業20%、観光業40%である。物価水準は低い。工芸品の輸出は年15億ドルだ。

到着

バリ島のデンパサール国際空港（1959年設立）へ着いた。マイナス4度の小樽から、34度のバリへ来るのだから温度差が激しい。ホテルは、クタ地域の「ラーマヤーナ・リゾート & スパ」である。州都デンパサールのホテルへ行きたいと言っておいたが、行政的にはクタもデンパサールにあるので、クタになってしまった。よく調べないとまずい。クタはビーチ・リゾートの中心でもある。

ホテルでは若いプートーさんが案内した。部屋はよい。ベッドの足が高く、上るのが大変だ。部屋にはベランダがあり、そこで煙草を吸える。ホテルは全室禁煙である。

毎日朝食がビュフェ方式で出る。バリでは朝、一日分の食事を作ってしまう、人々は個人個人で勝手に食べる。気温は外気が38度にもなる。バリでは毎日、朝夕、水を浴びる。

初めのガイドはスアルナさんで、JTBには日本人向けガイドが100人以上いる。我々が世話になったSTWでは23人いる、という。

「バリの人々はお金の計算がよくできない、だからごまかされる」と忠告された。ごまかすつもりはないのだろう。2012年には1円が110ルピアだ。バリ人も単位が大きいので、計算しにくいのではないか。通貨はルピア(= r p)で、紙幣は100, 500, 1000, 5000, 1万, 2万, 5万ルピアがあり、コインは10, 25, 50, 100, 500ルピアである。1999年に100 r p = 1・5円、2009年に1円、となった。通貨ルピーは、ホテルで両替した。1ドル

で9000ルピーであった。ヴィザが25ドルで、国へ入る時に払う。出る時は、ドルではなくルピーで300000ルピーを払う。

2012年に日本人客は、年19万人で、観光客全体では年290万人である。

12月17日、第1日目

朝 初めて、ホテルのビュフェ方式の食事をとった。ホテルにはプールがある。我々は時間が惜しくて一度も入らなかった。レストランやホテルに保安要員がいる。彼らは警官みたいな服装である。治安はよくないのだろう。道ではひったくりがあるそうで、しかしイタリアでもあるから不思議ではない。警察を呼ぶと、警官にお金を払うそうだ。

昼、近くの海鮮料理店で値段をみずに、あわびを注文し、びっくりした。1つ4千円だった。100グラム単位の値段しか書いていなかったのである。近くのコンビニで、煙草を買うが、安い。13-15円だ。煙草はバリでは作らないで、ジャワ島で作る、そこに工場がある。毎日このコンビニで水などを買うことになる。物価が安い。ホテルでは毎日水を2本サービスする。電気は220ボルトである。バリ・ビールがある。

午後から観光を始めた。ここでの観光はワゴン車がチャーターされている。運転手、ガイド、我々2人だから、大きい。初め、雑貨店=お土産店に寄る。「まだ何も見ていないので、選べない」と我々は言った。客が物を買えばバック・マージンが入るから、ガイドとしては連れて行きたいだろう。店の玄関や外にここの店の売り子が座っていた。といっても中年の男性たちだ。客がいらないからだが、変な風景である。ここでは労働力が余っているのがある。バリの人は自分の村の祭りがあると、無断で会社を休むそうだ。

自動車で行く途中の村で、ドリアンを見つけてくれて、1つ買って道端で食べた。1つ700円で、それを作る農村女性が売っていた。多分割高であり、普通はそんなことはないだろう。彼女としては望外の収入だろう。分かっていたが、念を押しただけで値切らずに買った。納屋にはドリアンがゴロゴロ転がっている。タイのドリアンと比べて、味が強く小さい。「日本人でドリアン好きとは、初めてだ」と、ガイドのスアルナさんに言われた。だがそんなことはないだろう。日本人は食べると思う。ドリアンは、女房を質に入れても買って食べるべきだ、というほどおいしい、という諺があり、昔、教わったことがある。だが、私はそれほどではないと思う。

自動車は30年使うそうだ。乗用車はとても高い。日本の自動車、バイクが多く走っている。交通信号はあまりない。だから好き勝手に走る。バイクは4人乗りをする人もいて、それは認められている。公共の乗り物はあまり無い。ただしベモという小型ライトバンが公共交通としてあるそうだ。

野良犬が多い。飼い犬を野放ししている。あるいは最初から野良犬だ。交通事故で死んだ犬を、昔は食べた。しかし高血圧になるから良くない、ということになった。

ウルワツ寺院

ウルワツ寺院へ行く。その森に猿が沢山いる。猿は保護されている。入る時、黄色い布を付ける。宗教上の理由からである。寺は高い所にあるので景色がよく、海が見える。ここはバリの南端であり、丘からジャワ島が見える。いい景色である。ここの観光客は多い。

寺院近くで、ケチャックあるいはケチャ(Kchak)・ダンスを見る。午後7時から始まり1

時間続く。木製のベンチに座って国際的な旅行者が2百人くらい観劇する。半円形の観客席があり、自由席ばかりである。出演者は半裸の現地成人男性100人くらいのコーラスであり、身振りで伴奏の代わりをする。主演者が何人か出る。ヒンドゥー教の神話からの物語りが踊られる。最後に火が燃やされる。「ラーマヤーナ」物語を、約70年前に取り入れた。「ラーマヤーナ」は、B.C.2世紀ころできたインドの叙事詩である。ラーマ王子の行状記である。日本では原典からの訳は、部分的にある。これは、別名モンキー・ダンスである。これはデンパサールでも行なわれる。バリの伝統文化は観光用に作られたものになった。踊りの参加者はプロではなく、素人の村人だ。バリは芸能・芸術の島として有名である。

ジンバランの海辺で夕食をとる。ロブスター付きを頼んでおいたのだった。名前の分からない海の白い魚を焼いたもの、そしてゆで蟹が出る。この魚は後に、鯛だと教わった。南の方では鯛も味がちがうのだと感心？する。砂浜はすでに真っ暗なので、食事が見えない、そこでテラスに移った。本来は、サンセットを見ながら食事するというものだったが、とんでもないことになってしまった。祖母が日本人だというウエイトレスがいた。ロブスターは移入である。生バンド演奏を頼むこともできる。ただしチップが必要だ。そんな気持ちにならないので、やめる。バリ・ワインがある。まだ十分美味しくはない。

バリでは家や店の前に必ず供え物を置く。自動車の中にも置く。神への供え物である。花などからなり、チャナンといい、薄切りの竹で編んだ駕籠にいれる。これは女性を作る。忙しい人は自分で作らずに買う。有名な花はプルメリアで、男性も耳のあたりにつけている。

18日、第2日目

ここからガイドはずっとアリさんになる。朝8時半から夜9時半までの丸1日観光だ。

ろうけつ染め店で買い物をする。その作り方を少し見る。私はTシャツとコースター、ワイフは、スカート等を買う。

銀細工店へ行く。銀細工はチュルク村が有名だ。銀細工の仕方を少し見る。19才の少年が、「自分は1カ月で1万円の給料だ」と言う。後に「それは特別だろう」とアリさんは言う。普通は3～4万円だとのことである。結局ここは、ひやかしだけで終わった。ところで少年の言うことは本当だろうと思う。たぶん2016年頃で、最低賃金は月1.5万円である。ちなみに、ガイド・スタッフは150万～250万ルピア、ホテル・スタッフが200万～500万ルピア、事務系が200万～300万ルピアである。

バリの人は、お金が入るとパーッと使ってしまうらしい。銀行預金はあまりしない。無尽がある。日本よりも休みは少ない、週休一日くらいだ。物価は日本の8倍低いと。

絵の村、絵の美術館へ行く、しかし美術館でなく、商売をしていた。民間の施設だった。そこで絵描きが雇われている。館の前で、数人の職人が座って絵を描いている。ここで学問の神ガーネシャの絵を買った。この神は象の鼻をしている。枠付きなので、「枠はいらない」と言ったのだが、「枠はタダだ」と言う。おまけをしてくれた。どこも売り手は日本語がうまいので、日本人が沢山来るのだろう。

エンブル寺院

タンバクシリンのティルタ・エンブル寺院を見る。また黄色の布を腰に巻く。清水がわき出る寺であり、この聖水・清水につかって祈り、清めをしている人もいる。西欧女性もつかっ

ていた。帰り際、土産物店が並ぶ。ペニスの形の木の栓抜きなどある。こんなものが売れるのかなと疑問だ。近くにスカルノ大統領が建てた別荘が高くそびえる。デヴィ夫人もここへ来たとかである。

キンタマーニ高原で、インドネシア料理のビュフェを昼食にとる。バトゥール山を見ながらだ。これは火山である。途中でスコールが降る。すごい勢いである、しかしすぐやむ。12月は雨期である。

棚田の村、テガラランへ行く。道の途中に、展望台があって、棚田を眺める。そこで5年生くらいの可愛い女子小学生に絵はがきを買わないかと、たかられた。「5万」と日本語で言っていた。つまり500円くらいだ。帰り際、私を買わなかったのに手を振ってくれた。素朴なのだ。「あの子たちはそのお金でどうするのか」と聞くと、「鉛筆やノートを買うのでしょうか」とガイドが言うので、買ってあげれば良かった、と悔やんだ。

棚田とは、山の斜面に段々の水田を開いたところである。だから水利が重要になる。バリでは水田耕作以外に、ココナッツ、コーヒーの栽培をする。

行くはずの、熱帯植物が沢山あるという植物園は、スコールが降ったのでやめたが、止んでから別のコーヒー園へゆく。そこにも熱帯植物がある。木には名札も付いている。麝香猫のコーヒーがある。コーヒーの試飲で、7、8種が出る。そこでコーヒーも売っている。麝香猫のコーヒーは、おいしいとされ、値段も高い。麝香猫にコーヒーの実を食べさせ、その糞からコーヒー豆を取り出し、もちろんよく洗い、それから作るのである。そこには麝香猫のいる檻もあった。実際に飲んでみたら、普通のバリ・コーヒーよりもしっかりした味だが、特別おいしいというわけでもない。このコーヒー店から、農村と棚田が見える。

タマンユアン寺院

タマンユアン寺院へ行く。バリで二番目に大きな寺である。この時はここに観光客がほとんどいなかった。もしかしたら休日で、ガイドが交渉してくれたのかもしれない。だから非常にゆっくり見られ、堪能した。またバリの寺院はそれぞれ構造が違っている。ありがたい。奇数の屋根の茅葺きの塔が並ぶ。どこでも寺院に僧がいないようだ。ここに門前市がある。

海辺のタナロット寺院を見る。そこへゆく前に門前マーケットがある。ここではあまり押し売りをしない。非常に観光客が多い。満潮には、寺院へ渡る場所は海水で隠れるらしい。だから引き潮の時しかわたれない。海の中の大岩の上に作られた寺院である。近くに白蛇神の記念もある。礼拝所には信者が並んで、洞窟内に入るのを待っていた。岩の上にある寺には観光客は入れない。ここにはクロボンという名物の餅菓子があるらしいが、知らなかった。ここでもケチャック・ダンスがあるそうだ。

ジャワから渡来した高僧ニラルタが、タナロット寺院やウルワツ寺院を開いた。

夕食は、近くの丘の上にある海鮮料理で。高い場所から海をみながらとるが、前日と同じ料理だった。タナロック寺院も見える。ここのサンセットは、いい時間だとすばらしい。

19日、第3日目

朝、バリ・マッサージの足もみをし、これはサービスで15分だった。よかったので、予約をする。

昼、近くの同じ海鮮料理店で、ココナッツ水を飲む。ココナッツが丸ごと1つ売っていたからだった。ココナッツといっても水だけだ。内側に少し白い部分がある。そこは食べられる。ココナッツ・ミルクはないようだ。ココナッツ・ミルクは、この白い部分と水分を混ぜて作るものである。りんごは輸入だ。

午後から観光をする。木彫りのマス村、石彫りのバトウブラン村を通過したと思える。

絵画を見に行く。ここは芸術の村とされる。ウブド地方に彫刻美術館がある、というよりも販売店である。ここは見ただけだった。それに値段が高いし、彫刻が大きいので、買っても持ち帰れない。白檀の彫刻などがある。

時間の余裕があったらしく、コーヒーの飲み比べ店に入る。麝香猫コーヒー、バリ・コーヒーなど試す。コーヒーは分量が多いので買わずに、チョコレートの中にコーヒー豆が入った物を買う。

ウブド

ウブド村に入る時、モンキー・フォレストがある。我々は見なかった。ウブド村を散策する。中心地の街路を2km位歩く。その際、果物を買った。物売りがかなり多い。タクシーの客待ちのドライバーが多い。この街ではあまり客引きはしていないようだった。わがホテルの周りではよく客引きがあるが。街路には食堂の店の前で食事のメニューを配る女性や、マッサージ店のチラシ配りの女性が多い。街や道に絵の店が沢山ある。

ウブドの朝市場が有名だそう。美術館もあるそう。

路の途中に民間の観光高校があって、それは夜学である。同じ校舎が公立小学校で、これは午前中に授業がある。この観光高校は先生がアルバイトで教える場合がある。バリには大学が3つある。サッカー場の前も通った。ウブドの王宮をゆっくり見る。近くのホテルでインドネシア料理の夕食をする。大変立派なホテルである。

バロン・ダンスをこの王宮で見ることになった。おそらくサレン・アグン宮殿だった。始まる前にスコールが降ったので、屋根付きの劇場へ移る。スコールは道路でくるぶしまでつかるほど降る。

初めレゴン・ダンス、次にバロン・ダンスが行われたようである。レゴンとは、ガムラン伴奏による舞踏芸術のことだ。舞踊は、ガムラン音楽で始まる。ガムランとは、様々なドラや鍵盤打楽器、太鼓による合奏である。

バロン・ダンスは、聖獣バロンと、歯をむき出した魔女ランダの戦いだ。バロンは太陽の象徴で、善霊であり、ランダは、闇の象徴で、悪の魔術を使う。

バリのヒンドゥー教には、神に善と悪がある。白と黒は、善と悪だ。神の像に白黒のチェックの布を巻いている。善と悪は互いに対立するが、人は否定しない。右はよい、左は悪い。生活には善と悪があり、その調和が大事、だと言う。

次に、舞踊劇スندا・ウスパンダが行われた。最後に主演女優が、英語と日本語で挨拶した。日本人観光客が多いのだろう。

20日、第4日目最終日

デンパサール市内

デンパサール（Denpasar）市中心に、バリ博物館、ププタン広場、カジャマダ通り、市場（pasar）がある。そこでデンパサールのバリ・ミュージアム（博物館）へ行く。そこは元・王宮だった。主に3つの部分からなる。ゆっくり見る。高樓から女性を探す王の話など聞く。王がここに登って、道行く女性を眺め、気に入った人が通ると招き入れるとのことである。ガイドは、「いいなあ」と言っていた。これは、1932年オランダ政府により建てられた。

市場も見学した。混雑しと多様で、通路が狭い。様々な果物から野菜、日用品、そして少しだが魚もあった。すべてが入り交じった強い臭いだ。何か買う気にはならない。

デンパサールで1番大きな中心的広場であるププタン広場に行く。ミュージアム＝博物館はここに沿って建っている。広場で人々がチェスをしていた。オランダの影響だろうと思う。1948年のオランダとの戦いの像がある。オランダに占領されて、多くの人が自殺したという。この際、残存日本兵士もバリ軍に加わって戦ったので、バリの人は日本人に好意をもつという。オランダは第2次大戦で、一時、日本にインドネシアを奪われ、大戦で日本が敗北してから、またオランダはインドネシアを占領したのであった。

昼はホテルへの帰り際に、途中のレストランで、私はナシ・ゴーレンを頼んだ。私はオランダ留学で、よくこれを食べたもので、なつかしい。ワイフはポテトの天ぷらをとる。ジュースはおいしい。パパイヤ・ジュースを飲んだ。我がガイドは、よいレストランを予約するようである。私たちはあまり食べられないので、普通の食堂でもよいのだが。

車のチャーター代は この会社は1時間千円で、ガイド、運転手を含む。食事、博物館入場料、駐車場代（20円）は、こちら持ちだ。

午後4時、ホテルで予約していた上半身のマッサージをする、30分、3000円だ。この値段は観光客向けだ。現地の人はこの値段ではやらないだろうし、してももっと安いだろう。バリ・マッサージは有名であるが、オイル・マッサージである。

ホテルの一角に、ナラ王とダマヤンティー姫の像が建っていた。「マハーバーラタ」の一部をなす、数奇な生涯を送った物語の主人公たちである（『ナラ王物語』岩波文庫、あり）。

夕、昨日買ってきた果物を食べる。マンゴー、ライチ、マンゴスチン、パッション・フルーツである。パパイヤは大きすぎるので買わなかったが、いつか食べたい。南国なのでパイナップルなどはおいしいはずだが、みずみずしくない。品種改良をしていないようだ。

夕食をまた例の海鮮レストランでとり、餃子と、煮物（豆腐、かぼちゃ、入り）にした。伊勢蝦など、生きているのを見せてすぐ料理をするシステムの店でもある。伊勢蝦は値段が100グラム単位千円くらいだが、このエビは700グラムくらいあるから、実際はやはり高くなり、食べなかった。ドラゴン・フルーツを注文した。これも味が無い。内側の白い部分で、黒い種があるが、そこの所を食べる。これをマンゴー・プリンで味付けしていた。

辛い物が好きと、ガイドのサルナさんは言う。バリ料理は、独特の味付けと、揚げ物が多い。暑いからだろう。私は何でも食べるが、バリの食事は長期間は食べ続けられない。ミネラル・ウォーター以外は飲まないほうがよい。ある人は、バリで普通の食事をすると、

日本人は下痢をする、と。

ホテルの隣に日本料理店があるのに気がついた。バリ料理の味がきついので、中華店に入ったわけだが、日本料理店に気がつけば、時々入ったかもしれない。だが結局一度も入らずに終わった。

ホテルには土産物店がある。ここでワイフは、孫用の髪飾りのプルメリアの花、友人にプレスレットなどを買う、私は絵はがき(1枚50円)だ。12月ころ、所どころで、新年の準備をしている、観光客のため、店ではクリスマスを用意している。ヒンドゥー教なのにクリスマスである。バリはカラフルであった。

日本と

ガイドが日本語を話すので、日本と日本語について聞いてみた。「英語か、日本語が話せると、職がある」と。「ガイドは日本語のレベルと賃金とはあまり関係がない」という。これでは困ると思う。日本語ガイドのライセンスをとると、エリートになれるそうだ。しかし試験にはコネが必要だ。

初めのガイドは、「今度日本へ行く」と、うれしそうだった。バリ人の友人が日本人女性と結婚し、その彼のところを訪れるそうだ。「日本は先進国だ、そしてだから日本女性は綺麗だ、だから好き、日本女性と結婚できたらよい」という。2人目のガイドは、「日本に行つて見たい、しかし結婚していて、子供も居て、経済的に苦しいから、日本には当分行けないでしょうね」と言う。

日本人女性と結婚するのは、色々いい点があるので憧れた。持参金で商売が始められ、うまくゆけば豊かになれる。だから最近増えてきた。それとともに離婚も増えてきた。

ここでは長男が親を見る。社会福祉はないからだろう。アジアでは皆そうだ。

21世紀にバリの平野部の宅地化が進んでいる。耕地が減少したのである。スバック(水利組合あるいは施設)の小作人にとって打撃である。バリには小作人がいるらしい。州や村と並んで、バンチャールという地域共同体がある。南部の平野地にホテルやレストランがどんどん建つ。貧富の差はすさまじいそうだ。プール付きの豪邸に住んでいる人がいる一方、例えば、田舎のウブドの中心でも電線がひかれていない、と。多くの人はカマドをつかっている、と。

ヒンドゥー社会だから階級=カーストがある。ブラーフマン=僧侶、クシャトリア=地主、ヴェイシャ=商人が上の階級で、内の人。スードラ=奴婢が外の人で、人口の9割である。庶民と訳してもよいかもしれない。下の階級の男性が上の階級の女性と結婚する時は大反対される。上の階級同士、下の階級同士が普通は結婚する。ただシインドほどきつくはない。できちゃった婚が多い。

バリ島が経済的に発展したので、ジャワ島から多くの人が働きに来る。彼らはイスラーム教徒である。バリはインドネシアで最も有名な観光地である。現在インフレが続いている。首都ジャカルタからバリに文化が来て、テレビ文化が真っ盛りで、ハリウッド映画が流行る。ちょうど戦後や高度経済成長時代の日本である。

夜、初めのホテルマン、プートー君とばったり会う、彼は愛想がよい。帰る日に迎えにくると言う。だから少しチップをあげた。チップは、ガイド2人と運転手1人にも出した。バリの人は素朴で良いようだ。何となくやさしい感じがする。バリは癒やしの島と言われる。

バリ島と文化

我々が行かなかった所は、バリでは総本山のブサキ寺院（アグン山、海拔4142m）で、アグン山は聖なる山とされ、バリ人の信仰の中心である。そして隣のロンボック島、その島はデンパサールから飛行機で30分である。そしてジャワ島中部にあるボロブドゥール仏教大遺跡であった。ボロブドゥールを見るには、バリとはまた違う旅になるから、知人に推薦されたが、行かなかった。

アグン山では、2017年9月22日に火山活動が活発化し、11月21日、噴煙があがった。2018年6月28日に噴火し、7月3日、溶岩が流出した。2019年5月31日、再び噴火した。ブサキ寺院には被害がなかった。

ホテルから車で空港へ行く。デンパサール空港の免税ショップで、土産用にコーヒーやチョコレートを買う。ところで指定された搭乗口で待っていると、搭乗口が急に替わったのだ。その対応が悪いので、我々は混乱した。

空港でトイレに入ったが、トイレは伝統的な日本のものと同じである。水道がきかない所はバケツと柄杓がある。普通はトイレット・ペーパーがなく、水と指とでお尻を洗う。

まとめ

バリの舞踊や絵はこの100年の間に出来た。ヨーロッパ人と現地人との合作である。（佐藤明美『バリ島 じゃらんじゃらん』トラベルジャーナル 1996年）伝統芸術と言っても、そうでもない。それを知ってがっかりした。ヨーロッパのように何百年もの歴史を持つ物ではない。これでいいのかなと考えさせられる。

(追記)

次の書が出た。倉沢愛子『楽園の島と忘れられたジエノサイド バリに眠る狂気の記憶をめぐって』千倉書房。